

ABIC 国際社会貢献センター Information Letter

No.27 2010年3月

政府機関関連への協力	領事シニアボランティアとしてロサンゼルスに勤務 …………… 2
	ジェトロ専門家としてインドネシアに短期駐在 (商工会議所の輸出促進制度構築) …………… 3
	ジェトロ専門家としてベトナム ホアラックハイテクパークで人材育成支援 …………… 4
自治体・中小企業支援	北海道商工連合会「農商工連携等人材育成事業」研修会に参画して …………… 5
外国企業支援	アルゼンチン経済ミッション商談会でABIC会員が活躍 …………… 7
教育	多摩大学グローバルスタディーズ学部からの講座受託 …………… 7
	横浜隼人中学校語学研修授業 …………… 8
	第8回大津市立栗津中学 国際理解学習(3年生対象)に参加して …………… 9
	練馬区立関町北小学校「国際理解教室」講師体験記 …………… 10
留学生支援	第2回鎌倉ユネスコ協会との交流イベント …………… 11
新刊紹介	「だから、日本って変？」 ～将来に明るい展望が開けない日本に、14の問題提起～ …………… 6
事務局だより	ABIC創立10周年記念事業について …………… 11

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル6階 (株)日本貿易会内
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5979
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒552-0021 大阪市港区築港2-8-24 pia NPO 4階 403号室
Tel & Fax : 06-4395-1188
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

政府機関関連への協力

領事シニアボランティアとしてロサンゼルスに勤務

外務省領事シニアボランティア たしま かずやす 田島 一靖 (元 前田建設工業)

建設会社での長い海外勤務等の経験と定年後の国際ビジネスコンサルタント、大学教員、地元のNPO活動等の経験が、外務省の領事シニアボランティアの仕事に従事する機会を与えてくれたと信じている。

現在、私は在ロサンゼルス日本国総領事館の職員の一員として、優秀な多くの上司、同僚に恵まれながら、毎日を有意義に過ごしている。

領事シニアボランティアの仕事とは、毎日、当館領事部に来られる邦人に旅券や戸籍関係の申請書の書き方のアドバイス、その他、諸々の問い合わせに領事と相談しながら、問題解決を図る事である。邦人と言っても、日本語を殆ど解せない方もいるので、この場合は、英語で対応している。また、多くの外国人（米国人、中国人、タイ人等）も日本への査証を申請に来るが、英語の他に、多少出来る北京語、広東語、タイ語等も大いに役立っている。領事シニアボランティアのもう一つの仕事は、自分の仕事を通じて気がついた課題に対して改善策を提言することであるが、どの業務においても、自分のキャリアが大いに役立っている。

私は、来館する多くの邦人や外国人から逆にいろいろな事を学ばせてもらっている。例えば、米国の事情だったり、日本の経済情報であったりする。

さて、日々、当館領事部フロアに来館する多くの方々の各種相談に乗ったりしているが、時々、日系スーパーマーケットや各イベントの会場で、私の顔を見て、見知らぬ方から、声をかけられることがある。“領事館ではお世話になりました”という声で、その人の顔を見るとどこかで確かにお会いした顔である。私の小さなアドバイスや相談事への対応が領事館と邦人の良好な関係構築に少しは貢献をしているのではと考えている次第である。

ところで、当館の管轄する南カリフォルニアの気候は、半乾燥性亜熱帯に属し、年間を通じて快適な気候に恵まれている。雨量は極めて少ない。また、夏は昼夜の温度差が大きいのが特徴である。また、多くの国立公園を擁し、自然に恵まれているのも特徴である。

米国の総人口は、約3億人で、その内、カリフォルニア州は約3千6百万人



総領事館事務所に筆者

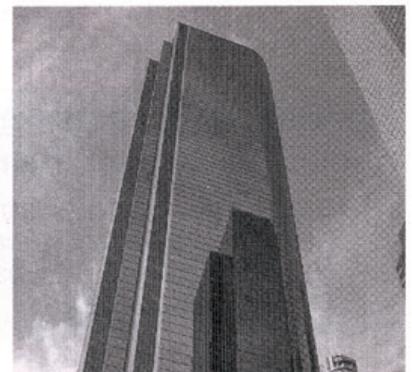
(12%) を占めている。全米の邦人数（2008年10月1日現在）は、約38万6千人である。公館別では、在ニューヨーク総領事館管轄の邦人数約9万6千人（24%）が1番を占める。2番目は在ロサンゼルス総領事館管轄の邦人で、約8万8千人（22%）である。故に、多くの邦人が住んでいるので、日本文化に触れる機会も多い。日系のスーパーマーケットや日本料理店も多数あるので、日本語で生活が出来るというのも特徴である。

私の任期は3年だが、残り勤務期間は、まもなく1年となる。残る1年の勤務期間を通じて、これからも邦人を含むコミュニティに私なりに奉仕出来たらと考えている。

最後に、この紙面をお借りして、このような機会を提供していただいている外務省、きっかけをいただいた国際社会貢献センター（ABIC）、いつもお世話になっている在ロサンゼルス日本国総領事館の皆さん、私を支えてくれている日本の家族、友人達、それに米国でいろいろお世話になっている多くの友人達に謝意を表したい。



ロサンゼルス市内風景
事務所(17階)からの眺め



総領事館が入居する52階建ての
カリフォルニアプラザ2ビル

政府機関関連への協力

ジェットロ専門家としてインドネシアに短期駐在 (商工会議所の輸出促進制度構築)

おがわ ひでひろ
小川 秀洋 (元 三洋電機)

2009年5月末から12月末までの半年間、(3ヶ月の短期駐在を2回)、国の委託を受けてジェットロが実施する支援事業の専門家としてインドネシアへ派遣された。

1980年代に長くインドネシア駐在を経験、また、1990年代から早期退職する2006年まで、年に数回のインドネシア出張を経験してきたが、今回のカウンターパートは華僑ではなく純粋インドネシア人(所謂プリプミ)であり、文化の違い、考え方の違い、その他色々な風習が違い、面喰らったところもあった。

ジェットロから課された役割は、輸出促進制度構築であり、制度を作る人を育てる、また、制度とはどのようなものであるか、タスクフォース・メンバーを指導した次第であるが、各州それぞれの商工会議所には若くて優秀な人材が揃っていた。一方、各州の中小製造販売業者は、自助努力する人が極めて少なく、「誰かがいつか何かをしてくれる」と思い込んでいる節があり、インドネシア地方経済の活性化には「人の育成」から入り、中小企業者を育てる人材育成、TOT(Training of Trainers)でトレーナーを育成することが最重要課題であるとことを痛感した。

縁とは不思議なもので、会社員をやめて独立後、北大阪商工会議所のインキュベーション・ルームに入居、海外アドバイザーの仕事をしたが、海外での初めての仕事がインドネシア商工会議所の支援であり、北大阪商工会議所で色々を経験したことが非常に役に立った。

さて、インドネシア商工会議所4ヶ所(北スマトラ州・中ジャワ州・北マルク州・西ヌサトゥンガラ州)を担当した次第だが、各地の会頭、副会頭、役員、事務局長、及びスタッフとのやり取りに慣れるのは早かった。役員は実業界の人であり、日本の情報を欲しがり、かつ日本とのビジネスチャンスを狙っておられ、また、日本に好意的な人が多く、一部の役員は華僑であった。



ハルマヘラ島のティドレ山



北スマトラ州商工会議所 IRFAN会頭(左)とショールーム開所式に臨む筆者

インドネシアでの具体的な活動で一番印象に残ったのは、北マルク州の州都テルナテ市への出張であった。北スマラウェシ州マナド市からプロペラ機に乗り換え約1時間かかったが、乗るには勇気がいる相当に古い飛行機だった。当初、その様な島での活動とは思ってもなかった次第だが、立派なホテルに広い道路、物資もインドネシアの各都市から入っているようで、インドネシアの地方経済が元気付いていることを自身の目で見て驚いた。

テルナテ市内の高台から海を越えて見るハルマヘラ島のティドレ山の美しさは極めつきだった。インドネシア紙幣千ルピア札に印刷されている山と海の風景を目の前にして2000年のイスラム教とキリスト教の宗教・民族紛争を思い出したが、何もなかったような静かなたたずまいと、小舟の行き来を見るだけでも「インドネシア」を実感した。余談だが、ここで食べたヤシ蟹の美味しかったこと、巨大で肉厚、茹でた蟹料理は感激モノだった。

派遣最終日の2009年12月23日、ヒダヤット工業大臣(インドネシア商工会議所の会頭を兼任)への報告会があり、「インドネシアには優秀な人材がいるが、まだ、数が少ない、地方中小企業を指導できるトレーナーを育てることが重要である」と、ご報告申し上げたところ、「本当に優秀な人材が地方にいるのか?」と聞き返され、「います」と即答したのだが、2009年の半年、各地で若く優秀な人材と出会えたのは幸せだった。

最後になるが、今回の活動を始めるにあたり、ご支援・ご協力して頂いた名鏡ABIC 事務局長、関西デスクの藤原コーディネーター及び短期駐在前にご自分の活動内容を踏まえて適切なアドバイスをして頂いた小川洋志郎氏(ABIC会員、前インドネシア商工会議所特別顧問)に厚く御礼申し上げます。

政府機関関連への協力

ジェットロ専門家としてベトナム ホアラックハイテクパークで
人材育成支援まつもと ときお
松本 時男 (元 蝶理)

ジェットロが国の委託を受けて実施する支援事業の一つとしての、ベトナムでの投資促進人材育成支援事業に携わることになった。ベトナム科学技術省直轄のホアラックハイテクパーク（工業団地）の人材育成支援である。

ベトナムには1994年から関わってきたが、その後2回目の駐在として2008年3月までバクニン省イエンフォン工業団地で仕事をしてきたことが何かで役に立つならばと、1年5ヵ月振りに再度ハノイの地を踏むことになった。

ホアラックハイテクパークが本格的に動き出したのは2006年からであるが、実は1997年頃にすでに構想は練られていて少なからぬ関心を持っていたこともあり、それに再び関わることになったことに運命的な出会いを感じ心が躍ったことも事実である。2009年9月から11月末までを第1期として、更に同年12月中旬から2010年2月中旬までを第2期として現場で同ハイテクパークのスタッフと仕事をした。

ホアラックは旧ハタイ省であるが現在はハノイ市となっている。ハノイ市南部から西へ約30kmの地点にある。赴任した当初はハノイ市中心部から車で約1時間10分かかっていた通勤時間が、帰国する時点では45～50分にまで短縮された。高速道路の工事が急ピッチで進められたことによる。スタッフは毎日、ハイテクパークの手配するバスで通勤している。

科学技術省のグエン・ヴァン・ラン副大臣がハイテクパークのトップである委員長を兼任している。一方、現場のスタッフはほとんどが20歳代という若い組織である。ベトナム自身が若い世代の国であるが、それにしても自分の息子・娘よりも若い世代との毎日は何もかも新鮮であった。何よりもベトナムで感心するのは、年配者に敬意を払うことである。日本では既に失われてしまったものをベトナム人は今も持っている。若いだけに当然のことながら経



ハイテクパーク内巡回後の談笑、左から筆者、ラン副大臣

験は少なく、発想にも限りはあるが一所懸命に話かけてくる姿勢には、若者の国であることを感じる。

本来の業務は同ハイテクパークへの企業誘致のための各種資料の作成要領、海外の投資家は何を期待してベトナムに進出を考えているのか、などを彼らに知ってもらい企業誘致に役立てることであるが、委員長の強い要望があり日本語を教えることも始めた。

受講者は皆とても熱心で、もっと時間を長くして欲しいという者も現れ、勉強した翌朝は必ず日本語で挨拶をする習慣もついた。日本語とベトナム語の共通点、異なる点も彼らにとっては興味深く、「何故？何故？」と質問があるのを頼もしくも思った。言葉は文化であり、言葉から考え方、習慣も理解出来ことから、ベトナム人と日本人の近さを彼らが理解してくれたと思う。「日本からの訪問者に日本語で挨拶をして、びっくりされました」と報告に来た時のスタッフの嬉しそうな顔は今もはっきりと思い出される。ABIC主催の「日本語教師養成講座」受講がこんなに早く役に立つとは思ってもしなかった。

日本人が何処かに置き忘れてしまった、休みの日には、おじいさん、おばあさんの家に集まるという習慣は今もベトナムには残っている。そんな土曜日に皆で食事をしようと声をかけたところ、奥さん同伴、或いは子供を連れてスタッフが集まってくれたことは嬉しかった。

仕事上で彼らには時には苦言も呈したし、長い議論になったことも、見解が全くかみ合わないこともあった。しかし、5ヵ月間一緒に仕事をしてきて、今も彼らからはメールが来る。何年か後に、何としても再訪問の機会をつくり、ハイテクパークの発展と、そして彼らの成長ぶりを見るのを楽しみにしている。



日本語教室

自治体・中小企業支援

北海道商工連合会「農商工連携等人材育成事業」
研修会に参画してくぼやま つよし
久保山 毅 (元 岡谷鋼機)

研修会の目的：北海道の農水産品の加工、商品化へ絞り込んだ事業で、北海道庁のバックアップにて北海道商工連合会が中小企業庁からの補助金を活用し、都市と北海道を結ぶ人材（推進役）づくりを目的とし、地域の農水産業、加工企業者とのマッチング体制づくり、売れる商品づくりに関してアドバイスする人材育成を目的として実施された。

参画メンバー：15名。ABICからは9名、その中で2009年2月に実施された「世界で一番素敵な過疎の町、厚沢部町の町興し」に参画した「ABIC6人の侍」のうち、日程調整が出来た安田さんと私の2名が参画した。その他は移住も考慮に入れて参加した渋川市からの古希間近のご夫婦、徳島県のグリーンビジネスの青年社長、東京のガーデニング誌出版社の女性副社長と女性プロカメラマン、緑地建設会社の青年営業部長、地元北海道でハーブ農園を営んでいる女性オーナーなど。

研修日程：

1回目：9月18日（東京）今回の農商工連携の意義、北海道の産品などの紹介と意見交換。

2回目：10月8～9日（札幌）道内農林水産商工業の動向と課題などに関する意見交換、3回目：10月27～28日 北海道認証産品チーズ工場視察（斜里郡大空町）、北海道認証産品ジャガイモ焼酎工場視察と試飲、「ちょっと暮らし移住お試しハウス」視察（斜里郡清里町）。

研修所感：

①道庁、連合会、訪問先町々の役場、商工会が作成し、実行している認証産品、現状分析、今後の計画、方針など



第一知床ホテル玄関前 前列左から3人目 筆者

非常にきめ細かく見るべきものが多かった。

- ②東京、札幌での産業動向、マーケティング論、地域ブランド品づくりなどの座学的講義などは経験豊富なABIC会員諸氏には物足りなかったのでは。
- ③訪問先町々での認証産品の工場視察では、メンバー各々の経験を踏まえた活発な意見交換ができた。

雑感：

○網走の寿司屋で食べたキンキとホタテはさすがに美味しい北海道産。これに味わい深い清里町の認証品焼酎「清里」がさらに追い討ちをかけ、ABIC仲間と財布の紐が緩みすぎるほど楽しんだ。

○内地では見られない直線で20km以上もあるという起伏に富んだ道路を走る送迎用バスの中から、ガイドさんが語る「～時の明治政府からこの北海道の一部の広大な土地を、原野とは言え、無償で手に入れた渋沢栄一、鳩山和夫など～」のエピソードを多少嫉ましい気持ちで聞きながら、晩秋



大空町商工会での特産品説明会



清里町での昼食がてらの特産品説明会

の北の大地の美しい自然に見とれ入っていた。知床岬から寒風の海に寂しく浮かぶ国後島に涙ぐむメンバーもいた。○四面豊富な海に囲まれたこの北の大地は、日本人の胃袋を満たす食糧生産基地とするだけでなく、観光、福祉の大地とすれば、世界の観光地スイスなどよりももっと素晴らしい観光地となるだろう。例えばドイツ、シュバルツバルトのバーデンバーデンのような心身共に癒やされるクアハウスの創設、その中には今は日本では禁止となっている健全な娯楽施設ルーレット等も開設し、リピーターが数多く訪れ、心身の癒やしと財布の紐を緩めて、地域の経済活性化に貢献できるようにすることも考えていいのでは。○第2回目の10月8日は近年稀な超大型台風18号の来襲で、羽田出発前に5時間以上も機中に閉じ込められ、大幅な遅れであったが無事に新千歳空港に到着出来た。明治元年、北の大地を目指した榎本武揚や土方歳三が乗った幕府軍艦開陽丸は暴風雪のため江差沖で座礁沈没したが、私たちの

JAL521便は強烈な台風にもかかわらず、無事目的地に到着した。この研修会の幸先の良さを感じた。

最後に、今回の研修プロジェクトは所期の目的達成までには多くの困難が待ち受けているだろうが、着実に前進できるものと確信する。先の厚沢部応援団ABIC6人の侍に続いて、北海道応援団がまた一つ出来た。

参加者（敬称略、氏名五十音順）

1回目：9名、 2・3回目：8名（千葉会員不参加）
 倉本 泰信（元富士通）、久保山 毅（元岡谷鋼機）、
 坂部 正治（元富士フィルム）、
 田中 洵（元日立ハイテクノロジーズ）、
 千葉 紘（元三井物産）、寺田 光雄（元三菱マテリアル）、
 中島 宏機（元旭化成）、松井 一也（元丸紅）、
 安田 勤（元丸紅）

新刊紹介

『だから、日本って変？』

～将来に明るい展望が開けない日本に、14の問題提起～

やすお
 なんば 安生 著 (ABIC会員、元三菱商事、

フランクフルト日本人国際学校国際交流ディレクター)

発行：文芸社

ISBN：978-4-286-08080-2

四六版256頁

定価：1400円（税別）

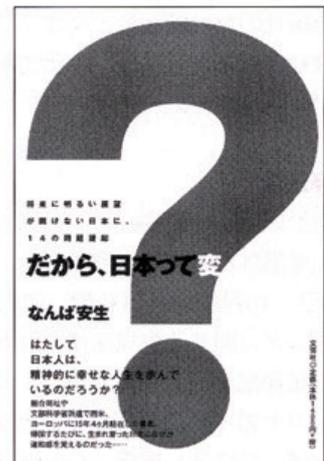
2009年12月発売

本書は、南米とヨーロッパで通算15年以上勤務した筆者が、海外目線から日本を見た時に感じる違和感、疑問点を辛口な中にも関西人特有のユーモアを交えて書いたものである。企業の駐在員としてだけではなく、日本人学校でも勤務した経験を有することから、取り上げる問題もごく身近な問題から、教育問題、国としてのありように至るまで多岐に亘っている。

お読みになれば、「おかしいんとちゃうの、これは。皆、疑問に思わんの？」という筆者の思いを、随所で共有できることであろう。

【本書の構成】

- 日本人は音に敏感？
- 日本では個が独立していない？
- 日本人は愛想が悪い？
- 日本人は幸せな生活をしている？
- 日本に大人の世界はある？
- 日本には人が多すぎる？
- 日本人の食感はインターナショナルか？
- 日本の自然に対する向き合い方は正しいか？
- 日本に町的美観という概念はあるのか？
- 日本の交通インフラはこれでよいのか？
- 日本は伝統・文化を重んじる国か？
- 日本の学校教育はこれでよいのか？
- 日本は福祉国家になれるか？
- 日本のありようはこれでよいのか？



外国企業支援

アルゼンチン経済ミッション商談会でABIC会員が活躍

アルゼンチン、ホルヘ・タイアナ外務大臣の来日に合わせて第22回日亜経済合同委員会が3年ぶりに東京で開催され、それに伴い、同国より約20社の民間企業が来日した。

2010年1月12日～13日（大阪、マイドーム大阪）、1月14日～15日（東京、ジェトロ展示場）で商談会が開催された。ABICからは、在日アルゼンチン大使館の要請を受け、当該商談会でのスペイン語通訳・アドバイス業務のため、大阪会員3名、東京会員2名を派遣した。

商談会に参加した企業は、対日ビジネス拡大に意欲的な建材、魚介類、服飾・ファッション、ワイン等、同国の特色を生かした有力中堅企業である。

アルゼンチンは、G20メンバー国でもあり、南米第2の



東京 ジェトロ展示場での商談会

経済大国として注目されており、同委員会に引き続いて都内で開催された「中南米協力フォーラム」（中南米から18ヶ国、アジア

から16ヶ国）への参加も今回政府機関の主たる目的である。

民間企業メンバーは、日本とのビジネス促進・拡大を期待しての来日ゆえ、各社の得意とする商品展示を行いつつ、現場でのPR活動を行う一般的なやり方と予想していたが、アポイント形式であった。そのため、見本市会場のような華やかさと賑やかさはなかったが、落ち着いた実質的な商談会であった。

当初、ABICからは、東京・大阪会員計12名で協力すべく準備をしていたが、種々の理由で訪日を取り止める企業も出たため、結局5名でサポートした（敬称略：飯島 懿郎（元三菱商事）、榎本 盛明（元丸紅）、仲田 慎太郎（元三菱商事）、藤田 和久（元パナソニック）、三好 康明（元三井物産））。

活動した会員によれば、数多くのアポイントをこなし、アテンドした何れの企業からも、会員の言語スキルは言うまでもなく、海外ビジネスの豊富な知見が、商談の取り進めに役立ち、大いに評価されたとのことであった。ABICとしてかかる活動が今後の日亜間のビジネス交流の一助となり、ますます進展、深化することを期待したい。

（外国企業支援グループ コーディネーター にしやま かつあき 西山 勝昭）

教育

多摩大学グローバルスタディーズ学部からの講座受託

2008年12月、ABIC吉田前理事長から大学講座グループ宛に突然メールが舞い込んだ。前理事長の売り込みにより、ABICの活動に多摩大学グローバルスタディーズ学部の学部長が興味を示されたとの情報であった。

当初の要請は立命館アジア太平洋大学で実施しているような、英語による講義ができる講師を紹介して欲しいというものであった。その後、日本語による新講座を含む多岐にわたるプログラムに対応できる講師派遣の依頼が寄せられた。合計6講座165コマに及ぶもので、しかも秋学期からの開始を希望していた。具体的には「日本語中級」「通訳入門」「簿記入門」「マーケティング」「世界の食文化」「Web進化論」である。コマ数が多く、準備期間がないにもかかわらず、推薦あるいは公募に応じてくださった熱心な講師候補の方々のおかげで、頻繁な討議の結果、講座構成が完成し、大学からの正式委託を受けることとなった。

多摩大学グローバルスタディーズ学部は2007年度に開設された新しい学部である。ちなみに2009年4月より、寺島実郎氏が学長に就任している。その入学案内に記された



「世界の食文化」講座講師打ち合わせ

標語は「現代の志塾」であり、少人数教育によって、コミュニケーション力を養い、問題解決力を身につけるということである。時代の要請に応える3つのキーワードの①国際性、②学際性、③実際性は、まさにABIC講師陣による講座提供にもっともふさわしい表現でもある。

出講いただいた講師は合計23名となった。「日本語中級」では様々なレベルの留学生向けにきめ細かい日本語指導を実施した。「通訳入門」では、基礎理論と実践という2人の講師の組み合わせにより、メリハリのある授業となった

ようだ。「簿記入門」では、簿記4級、3級合格を目指して、補講を行うこともあり、結果として優秀な学生は2級に合格したとのうれしい知らせが届いたという。

また、ABICが特徴とするオムニバス方式講座として実施した3講座については、まず「Web進化論」がある。3名の講師陣はケーブルテレビ事業、企業経営におけるIT活用、グローバルIT事業の国際支援という経験を有する方々で、それぞれが異なる分野を担当し、英語による講義を行った。

次に、「マーケティング」であるが、異なる産業分野の講師8名による構成とした。対象学生が就職活動真っ只中にある3年生ということもあり、多摩大学としては多い26名もの学生が履修した。出講した講師からの学生に対する評判は上々で、多摩大学が理念としている少人数制のアウトホームな雰囲気の中、学生たちは活き活きしており、講

師からの問いかけや討議にも積極的に参加してくれて、大教室での講義とはまた一味違った講義をする楽しさを味わったという。また、「世界の食文化」では概論に続く授業の中で、実際に現地の食物を持参し、ポットで調理し、学生に試食させるなどした8名の講師陣に、19名の学生達はさまざまな感想を述べていた。

無事に全講座が終了し、2010年度はさらに一部の講座が倍増となって315コマを引き受けることとなった。来年度の講座継続に向けて、それぞれの講座ごとの講師による反省会と打ち合わせ会、そして懇親会を行い、熱心な討議を行った。2010年度も多くの方が受講してくれることを講師全員が期待している。

(大学講座等コーディネーター いがり まゆみ 猪狩 真弓)

教育

横浜隼人中学校語学研修授業

2009年夏の甲子園に出場した横浜隼人高校の弟分にあたる横浜隼人中学から昨年11月下旬に語学研修への協力依頼があった。同校との接触は4年前に遡り、国際理解教育出前授業につき意見交換したものの、そのままになっていた。今回語学研修への協力団体を物色するに当たり、我がABICを思い出して頂いたもので、有難い巡り合わせであった。

同校は英語教育に特色を出すべく、数年前から、修学旅行地をカナダのバンクーバーに設定したほか、英語のネイティブ・スピーカーを呼んで、2年生を学力別に組分けした十数名のグループで実用的な会話練習を行ってきた。今回はネイティブ・スピーカーに代えてABIC会員から英語圏での勤務時に味わった体験を基にした、外国語への適応や異文化理解などについての授業をお願いしたいというものであった。

代々木のオリンピック記念青少年総合センターでの2泊3日という研修の初日の2009年12月22日午後、ABIC会員5名がそれぞれ4クラスで延べ20コマの授業を行った。授業時間が1コマ当り30分と限られたものではあったが、会員それぞれの勤務地での英語への適応体験と異文化理解を取り上げ、豊富な具体例を挙げて外国語習得が果たす役割を語った。

稲永丈夫会員(元 住友商事)のイギリス、川本恒彦会員(元 三菱商事)のアメリカ、世戸哲郎会員(元 住友商事)のオーストラリア、前田勝男会員(元 丸紅)のシンガポール、角井信行会員(元 丸紅)のカナダなど、英語圏の生活と文化をも含めた、言語習得のエッセンスを生徒達に伝えた。また、アクセントとイントネーションとリズムに意を用いれば、発音が下手でも通じ易いこと、熱意と気迫が相手を説得する力となることは、日本語会話と同じ



オーストラリアについて 講師の世戸会員

であることなどのコツも実例を挙げて披露した。

一方、日本人の多くが、外国語、就中、英語習得がグローバル化の最大のテーマと考えているようだが、言語で表現する内容の如何が、言語力と同等あるいはそれ以上の重要性を有することは、海外勤務豊富なABIC会員共通の認識であり、言語力を磨くと同時に優れた専門知識と豊富な一般常識を身につけることがグローバル化時代を生き抜く力となる点を強調した。

生徒は30分毎に次の講師が待機する教室に移動するという慌しさをもとめせず、熱心に講師の話聞き、メモを取り、積極的に質問を出すなど、この研修を前向きに活用しようとの熱意が滲み出ており、講師側もこのような研修で出前授業を行うのは初体験であったが、大いに元気づけられた。

同様の語学研修に来年度も参加させていただけるようであれば、本年度の体験を踏まえて、より大きな効果を挙げべく、学校側とも協議して準備したいと考えている。

(小中高国際理解教育コーディネーター かくい のぶゆき 角井 信行)

教育

第8回大津市立栗津中学校 国際理解学習（3年生対象）に参加して

橘 弘志（元三井物産、関西デスクプロジェクトスタッフ）

ABICの小中高校国際理解教育支援の一環として2002年に始まり、今回8回目を迎えた滋賀県大津市立栗津中学校への講師派遣授業が2009年11月27日に実施された。

同校では国際理解教育を目的として、ABIC会員による特別授業を取り入れてこれ、今回は授業対象国をブラジル、インド、中国、アメリカとして準備を進めたが、アメリカを担当する講師の都合により、急きょアメリカに代わって、ロシアとすることとなり、文字通りBRICsについての授業となった。

この授業は各国の事情に精通したABIC会員を講師として派遣し、各国の事情を分かりやすく説明することのみならず、聞き手となる中学生が、それぞれの国情をより身近に感じられるように、食文化、スポーツ、音楽、服装や生活習慣にも言及し、多面的に解説するものである。

毎回、各講師は資料のほかに、スライド、写真、ガイドブック等を持参し、工夫を凝らした授業を行っているので、日頃の授業では得られない知識を中学生が知り得る良い機会となっている（今回講師を担当したABIC会員とテーマは下記参照）。

各々のクラスで、生徒は、事前に担任の先生の指導の下、まず、「世界が、もし100人の村だったら」というテーマで世界における日本の位置付けと自分達がどんなに恵まれた環境にいるかを学び、次いで各国の事情を自ら学習し、クラス内で班毎に発表をするという過程を合計4校時にわたり経験した。

ABIC講師による授業当日は、各クラス共、各々の学習結果を発表することから始まり、次いで講師が生徒の興味をより多く引き出せるように話をするという流れで行われた。生徒の事前学習と仕上げとしてのABIC講師の話が相

（順不同、敬称略）

テーマ	講師名	元勤務先
中華人民共和国について学ぼう	高嶋 宏臣	三菱商事
ブラジルについて学ぼう	赤田 堅	丸紅
インドについて学ぼう	大久保 浩司	三井物産
ロシアについて学ぼう	橘 弘志	三井物産



ロシアについて講義する筆者

呼応して、生徒の理解が広がり且つ深まる効果が発揮されたと言える。

この効果は、授業中の生徒との活発な質疑応答で手応えが感じられたことや後日入手した先生方のご手配による生徒の感想文にも表れていた。

今回の授業実施に際し、河原田校長先生、寺西教頭先生をはじめ、西本先生、田村先生ほかクラス担任の先生方のご尽力を得ることが出来、授業後先生方から感謝のお言葉を頂くことができた。

生徒の感想文を読まれた河原田校長先生からは、「生徒の外国に対する興味を深めることができ、多くの生徒が将来海外に出ていき活躍することを願う」と、授業の成果を評価して頂くとともに、本授業に対するABICの支援に感謝する旨のお便りを頂いた。2010年度も同中学校の新3年生への授業をより効果あるものにできればと願う。



河原田校長先生（左から2人目）と講師
左から高嶋会員、大久保会員、筆者、赤田会員

教育

練馬区立関町北小学校「国際理解教室」講師体験記

くすのき ひろゆき
楠 裕行 (元富士ゼロックス情報システム)

平成22年2月9日、練馬区関町北小学校6年生に、ABIC活動会員6名が現地での生活体験をもとに、6カ国について国際理解講話を90分同時進行で行った。本来はクラスの異なる6年生各自が興味を持つ国を選び、その国の歴史・地理・文化を予習し、同じ国に興味を持つ約25名がクラスを超えて各国別グループとなり、聴講した。講師の話が始まる前に、児童代表が挨拶したが、「この日に備えてこの国についていろいろ調べたが、分からなかったところもあり、そこをよく理解したい」という、授業に向けた積極的な取り組み姿勢を感じた。

私は、米国での15年間の生活をもとに、興味の中心は学校制度や同年代の子供たちの日々の生活だろうと想定し、米国の人口や地図など基本的なデータや歴史は配布資料に記載し、講話は数多くの写真を集めたパワーポイントに沿って進めた。

導入部分で米国について知っていることを尋ねたが、オバマ大統領やマイケル・ジャクソンなどの最近話題になった人、また9.11事件を挙げた児童もいて驚いた。今から10年前彼らが2歳のときの事件で、覚えているわけではないので、事前の下調べでその内容を知ったのだと思う。普段は教科書や図鑑・年鑑や百科事典が中心の勉強方法と思うが、どこでどう調べたら良いのかということを考えるだけでも、この講話が児童の学習の仕方を見直す良い機会になったのではと思った。

意外だったのは、グアムやハワイも含めて米国に行っただことがある児童が三分の一ほどいたことであった。それが米国のことをもっと知りたいというきっかけにもなったのではないと思うが、とりもなおさず何か身近なところから(児童だけでなく)国際理解を深めるのが一番と感じた。私が用意した話も、身の周りにある店、映画、スポーツ、



授業をする筆者

人、年中行事を題材にして米国の言葉や文化(家族の絆や日常生活)に繋げていくという構成にしたので、その点はうまくいったと確信した。

普段は50分授業なので、途中5分間のトイレ休憩を設けたが、誰一人部屋を出て行くこともなく我慢しているのかと少し心配になった。長時間にわたる講話にも集中力を欠かさず真剣に聞いてくれたことは、最後の児童の挨拶で「州によって法律が違うことがわかりました」というくだりでわかった。先生から割り当てられ、事前に挨拶の内容を書いて覚えたのでなく、講話の内容を含めてお礼の言葉にしたことに感動した。最後に真剣に聞いてくれたことにお礼を述べ、これから地球環境を守り、世界平和を実現するには今回のような国際理解がまず第一歩と締めくくった。

学年主任から我々の講話でのスライドの使い方に感心され、また児童が長時間真剣に聞き入っていたことに対して賞賛の言葉をいただいた。ABICの活動目的が国際理解の推進であることから、この機会をいただきお役に立てたことを喜びに感じた。また機会があったら内容を更に充実させ、次回にはもっと多くの質問が出るようにしたいと思う。最後に、今回の国際理解教室開催に際して、関町北小学校校長先生、担当教諭、日本経済教育センター、ABIC事務局の皆様からいただいたご支援に感謝する。

(敬称略、順不同)



講師陣6名(敬称略)前列左から千々松、西澤、奥村、後列左から松本、鈴木、筆者

テーマ(国名)	講師名	元勤務先
中国	奥村 稔	大丸
オーストラリア	松本 仙作	ブラザー工業
イタリア	西澤 俊一	丸紅
フランス	鈴木 明	住友商事
ロシア	千々松 和夫	丸紅
米国	楠 裕行	富士ゼロックス情報システム

留学生支援

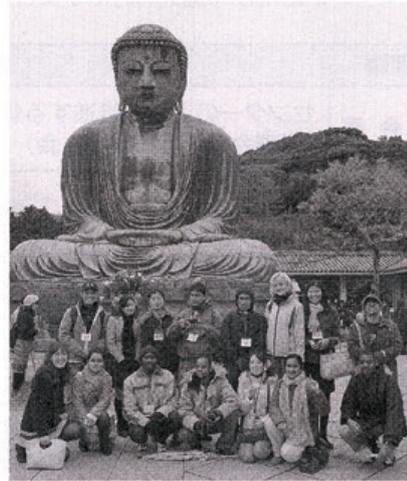
第2回鎌倉ユネスコ協会との交流イベント

11月22日（日）、ABICが日本語広場、日本文化教室、家族の出産・育児・健康相談・入園・入学サポートなどで支援している東京国際交流館在住の留学生や家族30名と、鎌倉ユネスコ協会との交流イベントが行なわれた。

当日は、高德院の大仏を囲む回廊のブースや広場の会場で、鎌倉市後援の下に、鎌倉地域で社会貢献活動を進めているNPOや任意組織の20数団体と鎌倉市による実行委員が主催する「かまくら国際交流フェスティバル」が開催され、その有力メンバーである鎌倉ユネスコ協会のゲストとして、昨年に続く2回目の訪問であった。

今年は清泉女子大学や聖心女子大学の学生7名が現地で合流し、鎌倉市内ツアーが終わる夕刻まで同行した。

回廊ブースでは、世界の手工芸・民芸品など各種のパザール、各国料理紹介の模擬店、世界の民族衣装の試着体験、各団体の活動報告や展示などが催された。また、舞台ではオープニングセレモニーに続く、各国の民族楽器の演奏、空手演武など、盛りだくさんのイベントを通じて大仏を訪



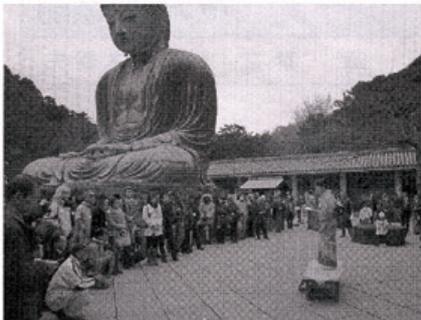
大仏前で記念撮影

れる日本人や外国人との交流が進められた。

通常は特別の賓客に限られるとされる高德院客殿庭園に案内され、客殿内で大仏建立の歴史などの話をうかがえたのは留学生にとり貴重な経験であった。

午後は鎌倉ユネスコ協会の案内で長谷寺、鶴岡八幡宮などを訪ね歴史散歩やショッピングを楽しんだ。鎌倉1日ツアーの交通費等は、10月17日に交流館で行われたABIC支援企業、ABIC会員等から寄贈された物品のパザールでの売上金の一部が充当された。

（留学生支援コーディネーター
田中 武夫）



かまくら国際交流フェスティバル開会式



高德院客殿内で鎌倉ユネスコ協会副会長（住職のお母様）から大仏建立の歴史の説明を受ける

事務局だより

ABIC創立10周年記念事業について

ABICは今年4月に創立10周年を迎えます。ABICでは、10周年を機に、以下の記念イベント実施や年史刊行を予定していますのでお知らせいたします。

創立10周年記念懇親会として、東京は3月26日（金）18：00～19：30メルパルク東京にて、大阪では4月23日（金）17：30～19：30丸紅(株)大阪支社講堂にて開催いたします。いずれもABICをご活用下さっている方々、及びABICをご支援下さっている法人・個人正会員ならびに役員各位をお招きし、ABIC活動会員との交流を兼ね、開催いたします。また、記念講演会（寺島実郎 三井物産戦略研究所会長／ABIC個人正会員）を5月24日（月）14：00～16：00日本経済新聞社東京本社 日経カンファレンスルームにて開催いたします。皆様ご参加ください。

記念出版物としては、10周年を節目として本年3月にリーフレット「ABIC10年の歩み」を作成いたしました。また4月には、ABIC誕生から今日までの歴史と活動を「ABIC 10年史」（仮題）として刊行予定です。

会員入会のお願い

国際社会貢献センター（ABIC）の活動にご賛同頂き、会員として資金的援助をしていただける個人の方や企業、団体のご入会をお願い申し上げます。

種類	内容	年会費
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体 一口 50,000円
		個人 一口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める個人、法人及び団体。	法人及び団体 一口 10,000円
		個人 一口 5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要 — —

正会員

団体・法人 (17社)				(社名五十音順)			
〈10口〉	(社)日本貿易会	伊藤忠商事(株)	住友商事(株)	双日(株)			
	豊田通商(株)	丸紅(株)	三井物産(株)	三菱商事(株)			
〈4口〉	㈱日立ハイテクノロジーズ						
〈2口〉	稲畑産業(株)	岩谷産業(株)	長瀬産業(株)	阪和興業(株)			
〈1口〉	協同材木貿易(株)	興和(株)	JFE商事ホールディングス(株)	蝶理(株)			
個人 (7名)				(敬称略・入会順)			
池上久雄	寺島實郎	小島順彦	宮原賢次	吉田靖男	岡素之	佐々木幹夫	

賛助会員

法人 (3社) (社名五十音順)

(有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ キーリサーチネット(株)

個人 (405名)

下記は2009年12月以降にお申し込み頂いた方です。ご協力に深謝申し上げます。(敬称略・氏名五十音順)

〈2口〉	前田 茂				
〈1口〉	井上 宏	奥山正裕	小沢規夫	川嶋則男	水光 勲
	鈴木一三	鈴木松子	辻尾嘉文	津守克平	手塚正明
	葉利 博	広瀬真市	藤村 登	古橋 肇	村上紹夫
	山本秀一				

活動会員 2,010名

(2010年3月現在)

e-mailアドレス・住所等の変更届けはお忘れなく！

e-mail アドレス・住所などの変更がありましたらご連絡ください。
転居先不明で返送される例が増えています。

e-mail : mail@abic.or.jp FAX. 03-3435-5979